

## 2年目を迎えた放射光学会

佐々木 泰三

日本放射光学会 会長



昨年4月、高良和武先生を初代会長として発足した日本放射光学会はことし2年目を迎え、東京世田谷の日本大学文理学部で盛大な総会を開催しました。当初正会員448名、賛助会員40社でスタートした会員数は2年目を迎えてすでに正会員671名を数え、賛助会員68社を加えて会の成長はなお止まることを知らぬ勢いがあります。学会誌も初年度で軌道にのり、充実した内容で会員の期待にこたえています。この学会の設立を熱心に準備された発起人、初代会長はじめ幹事・評議員の皆さんの熱意と努力、それに何にも増してこの研究分野で日夜活発な研究活動をつづけておられる会員の皆さんのエネルギーがこの学会の活動と成長を支えています。このような高度に充実した学会の2代目の会長を務めさせていただくことは私にとって光栄であり、また重大な責任を痛感します。

日本の放射光研究は昭和37年、東大原子核研究所にわが国最初の電子シンクロトロンが完成した直後からはじまりました。それから四半世紀を経て、我が国ではすでに4ヶ所の国の施設に多数の専用・共用の光源加速器を稼働させ、世界の放射光研究の重要な一翼を担っています。研究の機会を求めるユーザーのニーズはすでに現存の施設的能力を上廻っているばかりでなく、潜在的なニーズも年々増大の一途をたどり、新たな国や民間の施設を求める声は従来この研究分野を育成してきた大学関係者・文部省の枠をこえて多くの省庁・地方自治体・民間研究機関からもあがっており、次世代の研究施設への要望は枚挙のいとまもないほどです。

このような状況は放射光学がひきつづき急激な発展の途上にあることを示しており、今後の10年間で展望するだけでもさらに多くの新施設が誕生し、多くの新しい研究者の参入を迎えることは目に見えています。これは勿論喜ぶべきことには違いありませんが、一方このニーズを支えるべき技術や経験の育成が追いつかず、期待だけが空まわりするという危険もはらんでいます。

学会の活動は現在進行中の研究活動を基盤としていかなければなりません。将来の動向に対しても学会として従来達成してきた成果をもとに適確な予見と、有効な支援の努力を払う義務があると思います。とくに学会の教育・啓蒙活動は重要で、昨年度にひきつづき知識・技術の普及のため多くの努力が必要です。また国が主体となる大型・中型・小型の諸計画についてもわが国の現存施設の建設で発揮された研究者の知恵や経験を活かし、次世代の施設が真に現施設を超えて研究者の熱い要望にこたえるための方策をさぐることも学会の使命となるでしょう。

日本放射光学会は今のところこの分野で世界で唯一の存在ですが、その活動は世界各国から注目されています。放射光研究はその施設の集中的性格や寄生的性格のため、当初から国際的な協力が伝統となっています。国際的な競争と協力は多くの施設が専用光源を持つに至った今日でも学問の活性を支える大きな要因です。先進国間の交流に加え、今日さらに発展途上国がこの分野に参入する傾向が顕著となり、日本の国際的役割には新たな要素が加わって来ました。学会がこの状況で何をなし得るかも皆さんと共に考えていきたいと思えます。

放射光研究はその性格上昼夜つづけられており、研究の進歩発展にフォローアップするのは容易なことではありません。ホットな情報交換の媒体となる、これが会の設立の大きな動機で、この面でも幸い学会はこの1年大きな成果をあげてきました。2年目が更に増大する情報量への対応を迫られることはあきらかです。

学会の活動に対する皆さんの活発な御参加・御支援をお願いして御挨拶にかえます。